

異文化「終活」を考えるセミナー（その3）

ーモスク・教会・葬儀会館の視点からー

2022年8月21日（日）に、愛知県立大学生涯発達研究所は、あいち多文化ソーシャルワーカーの会、外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト、多文化ソーシャル・ムーブメント(TSM)と共催で、愛知県立大学地域連携センターの公開講座として、「異文化『終活』を考えるセミナー（その3）ーモスク・教会・葬儀会館の視点からー」を、Zoom ミーティングを利用した、対面・オンライン同時開催で実施した。その内容を以下に掲載する。

コーディネーター（司会）：神田すみれ氏（愛知県立大学客員共同研究員）

はじめに：山本理絵（愛知県立大学 教育福祉学部 教授）

1. 趣旨説明

王榮（木下貴雄）氏（外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト代表）

2. 在日外国人の弔い事情

モスクの場合：サラ・クレシ^{よしみ}好美氏（名古屋モスク）

教会の場合：松浦^{まつうらごろう}悟郎氏（カトリック名古屋教区）

葬儀会館：^{うの}鶴野 智教氏（株式会社ティア）

3. ディスカッション

※本報告書は、2022年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(B)）「多様化社会における教育と社会福祉の連携による生涯発達支援に関する総合的研究」（課題番号：21H00821 研究代表者：山本理絵）の助成を受けた。

はじめに

山本（愛知県立大学教育福祉学部）

この「異文化『終活』を考えるセミナー」は、今年で3回目になります。1回目は愛知県の多文化共生推進室の方に、愛知県の状況や政策についてお聞きし、そしてブラジル、インドネシア、中国の終活事情をお話ししていただきました。終活といいますが、最後のみとりや葬儀を中心にお話ししていただいています。そして、2回目はフィリピン、ベトナム、在日コリアン、ネパールの終活事情、そして今回3回目はモスク、教会、葬儀会館における終活事情ということで開催させていただいています。高齢者の外国人も増えているというところで、いろいろな文化や価値観を学びながら考えていこうという講座になっております。

たくさんの皆さま、ご参加いただきましてありがとうございます。それでは講師紹介等は、総合司会の神田さんをお願いしたいと思います。

司会（神田すみれ）

本日、4名の方に話をいただきます。最初に趣旨説明を王榮さんに、外国人の弔い事情ということで、モスクの場合、教会の場合、葬儀会館という順で、話をさせていただきます。では、最初に趣旨説明として、外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト代表の王榮=木下貴雄さん、お願いします。

趣旨説明

異文化「終活」の定義とその必要性

～多文化ソーシャルワークの現場から～

木下貴雄（王榮）

このセミナーは全体的に5回の開催を考えておりました、これまでに2回行ってきました。今回は3回目ということになります。これまでのセミナーにおきまして、日本に暮らす外国にルーツを持つ個人レベルでの個々の報告、あるいは日本での終活についてお話ししていただきました。今回、ちょっとテーマを変えまして、実際の宗教関係者、

あるいは葬儀会館の立場から死生観について、弔いについてのお話をさせていただくことになっております。

異文化「終活」とはどのようなことか。これまで2回セミナー行ってきましたが、なかなか異文化「終活」とは何かということが理解できないということで、この定義を、毎回ここにアップして、広義・狭義という二つの定義の下に、このセミナーを行っております。時間の関係で、スクリーンに掲示されている定義についてご理解いただき、それを踏まえてお聞きしていただければと思います。皆さんもご存じのように、外国人の定住化が進んでおります。それに伴って高齢化も進んでおります。日本で最期を迎えられる方も、増えているような状況にあります。日本においても、2025年以降は多死社会であるといわれるように、実は日本における外国人の死亡者数も、これまでの年間6000人台から7000人台に上がっております。その数は年々増加し続けています。国籍・民族に関係なく、人は人として生まれて、老いてやがて死んでいく。これが誰もがたどる道であり、避けて通れない道でもあります。

しかし、異国で最期を迎えるということは、文化、習慣、宗教、あるいは死生観などの違いによって、さまざまな問題を抱えているのも事実です。これまで2回、今回3回目になりますが、今後、異文化「終活」、異なる文化の終活にスポットを当てて、実際、在住外国人が抱えているいろいろな問題を浮き彫りにして、家族やあるいは本人、望んでいる最期をどう支えるのか、あるいは支えていくのか。そういったことを抽出し、本人たちに心から寄り添えるような、サポート方法をこのセミナーを通して見いだす。そして、皆さんで考えていただく。いつもこの場で強調しておりますが、考えるだけで終わってしまうのではなく、考え、次の行動に結び付けていく。最後に誰もが安心して最期を迎えられる、そういう社会の実現を目指していきたいと考えております。

6月に京都で開催された、日本移民学会の年次

大会を聴講してまいりました。シンポジウムのテーマは、日本に生きる移民の高齢化と弔いでした。内容はハワイに移民した日本人の墓の調査、在日コリアンの墓地の建設、在住フィリピン人の老後の居場所づくり、在住ムスリムの老いと死に関する意識。そういったテーマで議論されたシンポジウムでした。非常に勉強になった、有意義なシンポジウムと私が感じております。私たちが今、この3回にわたって異文化「終活」、日本に暮らす外国人の老後、あるいは最期について考えることをしているわけですが、実は今、私たちがここで在住外国人の老後、あるいは最期を考えるということは、今、海外にさまざまな事情で行かれている、そして高齢になった日本人の高齢者も、同じような問題を抱えているのではないかと思います。つまり私たちが今考えていることは、海外に暮らす日本人高齢者の問題にもつながっていくと感じております。ぜひ、そういったことも視野に入れていただきながら、このセミナーを聞いていただき、そして捉えていただけたらと思います。

先日、先週の8月15日、私がある番組を見て、もらい泣きをしながらずっと数時間過ごしました。一つは、日系3世が自分のルーツを探すために、九州を旅されていることと、もう一つは南米のパラグアイの日系移民の2世、70歳の方が、出稼ぎで日本に来られた弟たちのところへ、二十数年ぶりに会いに日本に来られたという番組でした。きょうだいたちが二十数年にも会っていない、親子も二十数年会っていないというような、異国に暮らす人たちの、そういった老後生活に、異文化背景を持つものとして、考えさせられるものがたくさんありました。その中で再会の3年後にパラグアイアンと日本を中継で結ぶ番組も入っていました。そこに私が一つ感じたことは、日本で再会したことを、パラグアイで亡くなられたご両親のお墓にお参りして、それを報告されていたということです。そういう意味で考えると、海外で亡くなられた方、その弔いと、そしてこれから日本で最期を迎える人たちの弔いと死生観。こういったこ

とが今後、日本の多文化共生において必要になっていき、なくてはならないサポート体制の構築が必要になってくるかと思えます。

こういったようなことも踏まえて、残り2回のセミナーについて、まず次回、「異文化『終活』を考えるセミナー(その4)」として、「終末期ケア・看取りの視点から異文化の“終活”について考える」というテーマで、来年も開催する予定をしております。各現場の関係者に、一步先にある、介護の先にある終末期ケア、あるいは看取りについての課題を挙げていただきながら、共に考えて、そして共に行動を起こしていくと。そんなことを願っております。先ほど司会のほうからも紹介がありましたように、本日、お三方にパネラーとしてご登壇いただいております。個々の立場から、多分われわれが普段なかなか知ることができないお話を聞けるかと思っておりますので、長丁場ですが、最後までお付き合いいただきますようよろしくお願いいたします。

ムスリムの「弔い」事情 ～イスラームの死生観～ サラ・クレシ好美(名古屋モスク)

名古屋モスクで渉外を担当しますサラといいます。イスラームの礼拝施設をモスクといいまして、この写真は名古屋市中村区にある名古屋モスクです。本日は「ムスリムの『弔い』事情」というお題をいただきましたので、イスラームの死生観と併せてご案内させていただきます。

まずムスリムというのは、イスラームの価値観に従って生きる人のことです。世界中に約19億人いるといわれますので、4人に1人がムスリムということになります。日本には23万人ほどですが、ここ愛知には、東京に次いで2番目に多くのムスリムが暮らしていますので、皆さんの中にもムスリムのお知り合いがいるとか、街で見かけたことがあるという方も多いのではないかと思います。

ます。実際、モスクの数も愛知県は国内最多で11カ所。名古屋モスクもその一つになります。

名古屋モスクというのは、実は戦前期にもありました。ロシア革命の後、共産党政権による迫害から逃れて大勢のタタール人がシベリア鉄道沿いに満州に流入しまして、そのうち神戸に到着した人たちが造ったのが今も残る神戸モスク、日本で初めてのモスクですね。名古屋に到着した人たちは、その翌年の1936年に現在の地下鉄今池あたりにモスクを造ります。国内2番目のモスクです。木造モルタル2階建ての小さな建物でしたが、異国でラシャや金物の行商をしながら、少しずつお金を貯めてやっと完成したモスクです。10家族52人が写る記念写真からも、念願のモスクを造った彼らの誇らしげな様子が伺えます。が、彼らはこの大切な礼拝施設を造る前に、実は墓地の確保を行っていました。これは八事霊園の一画にあるタタール人墓地の写真ですが、1928年8月から35年1月にかけて、少しずつ買い足していった15区画、約88平米の墓地です。異国で行商をしながら暮らすという決して余裕のある生活ではない中、7年がかりで墓地使用権を購入したということは、革命運動のさなかに大勢の仲間を失い、命からがら逃げてきた彼らにとって、死は非常に身近なものだったからでしょう。本日お話するイスラームの死生観から、彼らがモスクよりも何よりもまず先に埋葬の場の確保を優先した理由をお分かりいただけたと思います。しばらくお付き合いをお願いします。

さて、今お見せしている今池のモスク、残念ながら1945年5月の名古屋大空襲で、B29の爆撃によって焼失してしましまして、タタール人たちもその後各地に分散。以後半世紀以上、この地方にモスクはありませんでした。その流れが変わるきっかけは、日本政府が掲げた「留学生10万人計画」です。当時8000人程度だった外国人留学生を10万人にしようというもので、これは20年後に実現するのですが、積極的に特に国立大学を中心に留学生の受け入れが進みます。当然その中には

イスラーム諸国からの留学生もいますから、礼拝場所の確保が必要になってきます。愛知県では、名古屋大学や豊橋技科大の学生らが中心となりました、アパートやビルの1室を賃借しながら、いつか自分たちのモスクを造りたいと募金活動を続けていました。その結果、1998年7月に完成したのが現在の名古屋モスク。実に半世紀ぶりのモスクです。その後、岐阜大学の留学生を中心に岐阜モスクも造り、この二つの運営母体が宗教法人名古屋イスラミックセンターということになります。

そのモスクの活動は、当然ですが礼拝を執り行うことです。名古屋モスクでは、金曜日の集団礼拝に集まるのは200人程度ですが、イードという祝日には2000人ぐらい集まりますので、市内のホールをアレンジします。下の写真はコロナ前、名古屋市公会堂でのイードの様子、今年はソーシャルディスタンスを確保して1000人ぐらいがポートメッセなごやに集まりました。他にも名古屋モスクでは、クルアーン教室や食事の提供、見学対応、他に入信・結婚・葬儀といった、いわゆる冠婚葬祭的なことも行っています。この葬儀についてのお話をする前に、まずイスラームの死生観をご理解いただこうと思います。

日本には輪廻という考え方がありまして、時間はぐるぐると永遠に回り続けます。今の命の前にも別の命を生きていて、今の命が終わると次の命に生まれ変わる、また生まれ変わって、それがずっと繰り返されていくという考えですね。先日ネットで前世占いの広告というのを見かけました。前世が犬だった人は天真爛漫な魅力があると書いてありました。30年以上も前に、生まれ変わったら一緒になろうという約束をした歌い手さんもいました。もっと最近では、アニメ映画の主題歌で「前前前世」という楽曲も流行りました。こういう円環的な時間の流れが一般的な日本では、前世が犬だと言われても受け入れられるし、「前前前世」みたいな新しい言葉が出てきても理解できる。でもムスリムが前世が犬だと言われると、かなり仰天します。

それはどういうことかといいますと、一神教において時間は直線に流れます。始めがあって終わりがあつてある。ある一点から始まった時間が、何十億年か何百億年か分からないですが、ずっと一方向に進んでいって、それがいつかばたつと終わると考えます。この長い時間のどこかで一回だけの人生を生きて、繰り返しがないと考えるのが一神教、つまりユダヤ教・キリスト教・イスラームに共通する時間の考え方です。

その直線の時間を生きるユダヤ教・キリスト教に共通する聖書を引用しました。全ての始まりに神は天と地を、さらには太陽も月も大地も海も、動物も鳥も、そして人間も創造しました。時間はここから始まります。そして時間の終わりには、この存在が全ての人間は生きていたときの行い＝しわざに応じて裁く。つまり神は創造者であり審判者でもあるわけです。

イスラームの聖典クルアーンにも、同様の記述があります。人間は神によって土の塵あるいは泥から創られ、生きる時間を定められ、その間に行つたことに対しての裁きを受けます。

この創造者であり審判者である存在は、宗教によって民族によって、ヤハウエだったりデウスだったりアッラーだったりと呼び方が異なりますが、指しているものは同じ、創造者であつて審判者である唯一絶対の神ということになります。

実はこの一神教の世界観において、時間の終わりは全ての終わりではありません。聖書にも、土の中で眠っていた死者は起こされて審判を受け、そこから永遠の生命、永遠の始まりであると記されていますし、クルアーンにも永遠の刑罰を受ける者、永遠に樂園に住む者についての記載があります。ですから人間が死ぬということは、現世の有限な時間の終わりを意味していると同時に、無限に続く来世への始まりでもあるわけで、だからこそこの審判を下す存在を畏れて崇めて正しく生きることが大事になってきます。

アラビア語では、現世がドニヤー、死んだ後の世界をアーヒラといいます。イスラームの死生観

をご理解いただくために、このドニヤーとアーヒラをもう少し詳しくお話してまいります。

まずドニヤー（現世）ですね。先ほど引用した聖書には、人間は土のちり、ヘブライ語でアダマーから創られたとあります。このアダマーで創つたひと型に、神が息を吹き入れられたのがアダム、これが人間の始まりです。その人間の命の長さはあらかじめ神に定められていて、その決まつた期間に何をなしたかは、各自の両肩にいる天使が記録していると、イスラームでは考えます。すなわち私がやつた善い行いは右肩の天使が書き留めてくれています。私がやつた悪い行いは左肩の天使が書き留めているわけです。そして定められた命の期間が終わると、肉体は埋葬されて朽ち果て土に帰ります。魂はバルザフ（冥界）という場で最後の日を待つことになるのですが、ここで魂はまた別の天使から信仰に関する問いかけを受けて、それによって自分がやがて行くべき場所が天国か地獄かの予兆を感じつつ、最後の日を待つことになるのだそうです。

そして最後の日、バルザフで待機していた魂が生前の姿で復活して、神の前に出て審判を受けます。このときに両肩の天使が書き留めた記録が天秤にかけられて、善い行いと悪い行い、どちらの記録が重いか量られます。この秤は公正で、たとえ芥子粒一つの重さでもきちんと量られると、クルアーンに記されています。ですから、ほんの少しでも善い行いの記録が重ければ、ジャンナ＝樂園に住むことになります。そこは各自の望むもの、目を喜ばすものがある至福の場であつて、クルアーンにはその具体例として、砂漠の民にとって憧れの川が流れていたり、男性にとって喜ばしい表現だったりという描写がいろいろ出てきますが、要するに各自にとって物質的にも精神的にも望ましい喜ばしい理想の場所であるということのようです。

一方、悪い行いの記録が重ければ、ジャハンナム＝地獄へ行くことになります。アラビア語のジャハンナムは、ヘブライ語のゲーヒンノムあるいは

はギリシャ語のゲヘンナと同じ語源の言葉で、同じものを指していると思われます。つまり聖書でイエス様が、「地獄ではウジが尽きず、火も消えることがない」と繰り返されている、そういう恐ろしい場所ですね。クルアーンでも、火勢が衰えるたびに神が烈火を加えると書かれている、やはり燃え盛る炎のイメージがある場所です。

右側の引用、旧約聖書に記された「あなたは塵だから、塵に帰る」は、神の言葉です。つまり土からできたものを土に帰すことは、神が定めた律法の一つなわけです。さらには、遺体を焼くことは地獄の炎をイメージさせるものであって、かつ最後の日に復活する肉体がなくなってしまう、つまり現世においても来世においても完全に消滅してしまうとことを意味します。ですから、あえて遺体を焼くということには、特別な意味が生じます。

例えばユダヤ教の国イスラエルは、死刑廃止の国ですけれども、唯一例外的に処刑されたのが元ナチスのアイヒマン、しかもその遺体は火葬されました。現世でも来世でも完全に消滅させようという、徹底的な懲罰、歴史的な復讐ですね。中世のキリスト教世界で行われた魔女裁判で、彼女たちが火あぶりの刑に処せられたのも、同様に最後の日の復活さえも許さないという宗教的な懲罰の意味合いが含まれていたと思われます。イスラームでも 2015 年、IS がヨルダン人のパイロットを焼殺しましたが、そのおぞましい行為に対してアラブ諸国は、最大の冒涇だと IS を強く非難しました。ということで、一神教における火葬に付随する特殊なイメージ、そしてなぜ土葬にこだわるのかを、何となくお分かりいただけたのではないかと思います。

ですから、過去に山梨県石和町で火葬された身元不明の遺体がイラン人だと分かったとき、大使館の職員が現地入りして抗議をして、イラン国内でも報道されるなど国際問題に発展しました。身元不明でなくても、日本人のご家族にご理解がない状況では、火葬されてしまうことがあります。

例えば名古屋モスクでも、日本人のご遺族の意向で火葬されてしまった…という 3 年前の事例をお話ししようと思っていまして、つい 10 日ほど前にもまた同じことが起きました。亡くなられたのは日本人の女性で、外国人のご主人は強く埋葬を主張したものの、結局ご実家のご意向で火葬されてしまいました。2 年前には、仏教国であるスリランカ政府が、少数派であるムスリムを迫害する意図で火葬を義務付けるという政府決定を下しました。それに対してアムネスティ・インターナショナルなど国際社会からの批判が強くなり、結果的には火葬強制策は撤回するに至りましたが、火葬が主流である日本に暮らすムスリムにとって、これは他人ごとではない恐ろしい問題です。

新型コロナで感染死したタレントさんが、ご家族との対面もないまま火葬されて遺骨だけ届けられたという報道が世間をにぎわせた時、不安を感じたムスリムからの問い合わせが名古屋モスクにもありました。そこで用意したのが、「埋葬に関する意思表示」というフォームです。ちょっと小さくて見にくいと思いますけれども、配布資料のほうに名古屋モスクの QR コードがありますので、よろしかったらそちらからアクセスして見てください。法的拘束力はありませんが、本人の署名のある書類をご家族とか自治体との交渉に役立つことを期待してご用意いただいています。

その名古屋モスクの弔い事情についてご説明します。まず、ご遺族や知人の方からモスクに、とかたいてい夫の携帯電話に連絡が入りますので、すぐに病院と葬儀社に連絡をし、ご遺体をモスクに運ぶ段取りをします。葬儀の一連の行為をジャーナーザといいます。ジャーナーザへの参加の呼びかけも同時に行います。それと同時に埋葬の手配も急いで進めなければなりません。ご本人、あるいはご遺族の希望の埋葬地を確認し、もし海外に搬送することになれば、大使館に連絡して死亡診断書の英訳を提出したり、航空券を手配したり、貨物としての通関手続きを行ったりします。それらを一手に代行してくださる葬儀社も、最近

は幾つか増えてきているようですが、かなり高額で、その負担がコミュニティーメンバーにとっては大きいので、最近では自分たちでできる範囲まではやろうという動きもあるようです。

その一方で、埋葬は速やかに行うべきだという預言者ムハンマドの伝承に従って、国内での埋葬を選択される方もいらっしゃいます。その場合は、モスクでのジャーナーザの過程を終えたら、ご遺族や知人の方々とご一緒にご遺体を埋葬地に搬送することになります。

そのジャーナーザの過程を具体的にご説明します。預言者ムハンマドがその妻に語った記録によりますと、遺体を「洗い、覆い、礼拝を行ってから葬る」と書かれています。イスラームでは、ムハンマドの言行の記録が生活の指針や法的根拠になりますので、葬儀についてもこの四つのフェーズが重要となります。順番に見ていきますね。

まず洗体ですが、これはネット上から取った写真で、私は女性の体しか洗ったことにはないのですが、女性の場合はこの写真と違って、もっと大きい布で上半身も全部隠して、その下にはさみを入れて衣服を脱がせます。洗う人にもご遺体の肌はできるだけ見えないようにするわけです。ムスリムが礼拝の前に手足や顔を洗うお清めをウドゥといいますが、そのウドゥをまずご遺体に施して、それから体の右側、左側、その他の部分を順に石鹸と水で、3回ずつ洗って、また最後にウドゥを施します。名古屋モスクの場合、3、4人が遺体を洗っている間に、その横で別の数人がカファンというご遺体を包む大きな布を順番に包みやすいように広げて、そこに砕いた樟脳をまいて香りを付けるというような準備をしておきます。カファンは、女性の遺体の場合は頭を覆うヒジャーブも含めて、全部で5枚用意されますが、男性の場合は3枚だそうです。

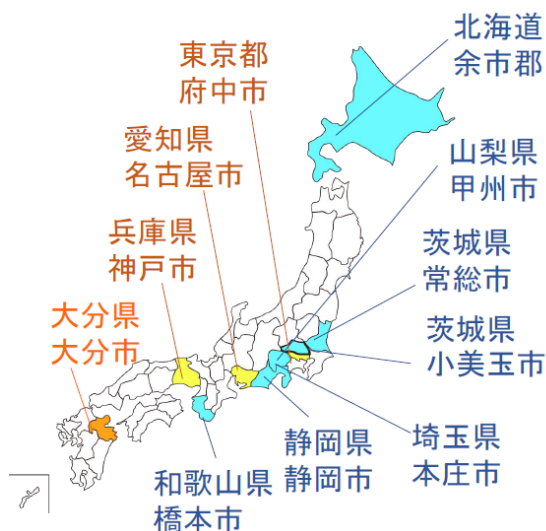
洗体が終わったご遺体を、その広げられたカファンの上にみんなで運んで、決められた手順に従って包んでいって、最後に紐状の白い布で固定する、ここまでで覆いは完了です。ちなみにイスラ

ーム圏では、これをご家庭でやるとかあるいは病院で専門の方が行うそうですが、日本ではそれも難しいので、モスクがこれを代わって行っています。

礼拝ですが、通常の礼拝は立ったり座ったりという動作がありますが、ジャーナーザの礼拝は立ったままです。ご遺体の後ろにイマームという礼拝を先導する人が立って、その後ろに参列者が何列かに並んで行きます。日本で一般的なお葬式だと、お通夜と告別式にそれぞれ1、2時間かかると思いますが、イスラームの場合はおよそ5分で終わります。その後、速やかに埋葬地に運ぶことになります。墓穴に遺体を入れる際は右側を下にして、ムスリムが礼拝する方向＝メッカの方向に顔を向けて安置し、ある程度の高さを空けて板で蓋をした上に、参列者がみんなで順番に両手ですくった土をかけていきます。お墓はこの写真のように、土が少し盛り上がっただけの簡素なものです。

埋葬地の一例として、これは静岡県の清水霊園の写真です。このように霊園として整備されていて、既に墓穴が用意されています。ここにカファンで覆ったご遺体を横たえて、ある程度の高さを空けて板で蓋をした上にまた土がかけられて、最終的にこのような感じのお墓がずらっと並ぶということになります。国内には他にも数カ所、ムスリムのための埋葬地があります、ブルーで示した道県ですね。黄色で示した都県でもかつてはムスリムを埋葬していたのですが、今は条例で土葬が禁止されてしまったり、空いている土地がなかったりで、新たな埋葬が難しいです。冒頭でタタール人が埋葬されているとお話ししました八事霊園もその一つです。墓地区画自体は名古屋モスクが管理しているのですが、私たちは使用できないので、先ほどの静岡や最近では和歌山の霊園を利用しています。

〈国内の埋葬地〉



よくメディアの方から、埋葬地がなく逼迫して大変ではないですかという取材の申し込みがありますが、この地図からお分かりのように、実は名古屋モスクは立地的に良い方で、幸いなことに、あまり逼迫している感はありません。一方、東北や瀬戸内・九州には近県に埋葬地がないので、そういう地域の方々はご遺体を運ぶのにも一日がかりですし、その日のうちに帰ってこられないような距離だとお墓参りも簡単にはできない、時間的にも金銭的にも、負担が大きい現状にあります。

そんな中で、大分県のムスリムコミュニティがもう 10 年以上前から埋葬用の土地を探し続けて、ようやく 4 年前、8000 平米の土地を購入しました。が、いまだ墓地建設は進みません。彼らが購入したのは、土葬を制限する条例がない日出町にある、集落から 3 キロぐらい離れた山の中の土地だったのですが、町に建設許可を求めたところ、町民の反対運動が起こりました。その理由は記事にもありますが、水質汚染とか風評被害というのが挙げられました。そこで町のほうが、集落や水源から離れた土地を代替地として提案してきました。そこは、町道を一本挟んだ向かいがカトリック修道院の土葬墓地で、これまでも埋葬先がないムスリム 3 人の仮埋葬を受け入れていただいているという、もう 30 年以上も土葬が行われてきたエリア

でした。ここならばということで、今年の 5 月、日出町から条例の基準適合の判断が出て、やっと墓地建設が進むと思ったところ、今度はお隣の杵築市から 1300 人分の反対署名が提出されてしまいました。

キリスト教徒の土葬が 30 年以上行われてきた土地でも、ムスリムじゃ駄目なのですね。イスラームはイメージが悪いからという声も聞かれます。確かに海外では卑劣なテロ行為に走る、イスラームを自称する変な集団がいます。メディアがその都度、イスラームと繰り返して報道しますので、イスラームに良くないイメージを持つ方がいるのは仕方がないでしょう。でも、あのような危険な集団がイスラームを代表するわけではないことは、皆さんもご存じのとおりです。

例えば、かつて日本にも原始仏教とチベット仏教の融合だと自称しながら、世界各国で軍事訓練をしたり、化学兵器を生産したり、地下鉄でサリンをまいたりという物騒な集団がありました。その集団の当時の信徒数の、日本人全体に占める割合は約 0.01 パーセント、非常に少ないです。これをもって、日本人みんなが危険だというイメージは、多分海外の方どなたも持たなかったと思います。この集団に属さない日本人のほうが圧倒的多数ですから、それは当然です。自称イスラームの IS、CIA の分析に従うと戦闘員が一番多いときで 3 万人だそうですが、世界のムスリム人口に占める割合は約 0.0016 パーセント、例の自称仏教集団の割合よりもう 1 桁少ない人数です。つまり 99.99 パーセント以上のムスリムが、この卑劣な集団とひとくくりされることに戸惑っていること、ご想像いただけるでしょうか。

クルアーンには、誰か一人でも殺したら、全人類を殺したのと同じだと書かれています。命を創れるのは神だけです。ドニヤーにおける命は神から預かったもので、人間が勝手にどうこうしていわけがない。殺人だけでなく、自殺だって絶対にやってはいけない大罪です、間違いなく地獄行きです。かつて自称仏教集団と本来の仏教の教え

を、日本人は切り離して見る事ができたように、自称イスラームの集団とイスラームの教えを別のものとして捉えていただけると、ムスリムに対する誤解も多少は緩和されるのではないかと期待します。

イスラームの死生観を表すクルアーンを引用します。ムスリムは身近な人が亡くなったとき、必ずこの赤い線を引いた部分を、アラビア語で唱えます。「インナーリッラーヒ・ワインナーイライヒ・ラージウーン」。ご遺族にかけられる言葉もこれですし、ご遺族もこの言葉をかみ締めながら口にします。イスラームにおいて、私たちの命は神から与えられたもの、定められた期間が終われば神の元に帰る存在だということを常に意識して、むしろアーヒラでの生活を楽しみに、ドニヤーで精いっぱい善行を積むという生き方をする者にこそ神からの祝福と恵みがあり、正しく導かれるわけです。

下の引用にもありますように、誰でも皆、死を味わいます。日本人の多くは、死んだらどうなるのか分からないという漠然とした不安を抱きがちですが、ムスリムにとって死は無に帰ることで、消失してしまうことでもない、それは今ある生活の、ドニヤーの終着点でしかありません。最後の日に復活し、審判を受けて、右肩の天使が書き留めた善行が十分に報いられること、それが永遠に樂園で過ごすという希望につながるわけですから、不安は少ない。これがイスラームの死生観です。

日本に外国人ムスリムが定住するきっかけとなったのは、1980年代のニューカマーと呼ばれる外国人労働者たちの大量流入でした。彼らは働き盛りの20代30代の若い外国人ムスリムで、かつてのタタール人と同じように、働いて少しずつ貯めたお金を費やして自分たちの礼拝場所＝モスクを造っていきます。1990年代には11軒しかなかったモスクが、2000年代には48軒、今では100を超えるモスクが国内にあります。が、初めの頃に造られたモスクは、造った人たちも利用する人たちもまだ若くて、弔いを意識した造りにはなっていないのです。1998年にできた名古屋モスクもそう

です。ご遺体を洗う施設が整っていません。初めて私がお遺体を洗ったのが2005年、愛・地球博で急死したコンパニオンの女性だったのですが、礼拝前に手足や顔を清めるウドゥのための水場に板を渡して、つまりかなり低い位置にあるご遺体を、腰をかがめながら、苦しい姿勢で洗ったのを覚えています。その後、脚付きのステンレスの台が導入されて腰をかがめる必要はなくなりましたが、ウドゥのための水場を利用することには変わりがなく、先ほどまでご遺体を洗っていた所で、手を洗って口をすすぐという状況は今も続いています。

それに対して、これは最近改築された他県のモスクの、洗体用施設の写真です。モスクが造られた当初はこうした施設はなかったそうで、モスク管理者にその理由を聞くと、「誰も死ななかったから」という答えが返ってきました。まさにそれが今各地のモスクが抱える問題なのだと思います。外国人ムスリムの定住が始まって40年、当時働き盛りだった20代30代の若者は、いまや60代70代の老人です。これからはこうした使いやすい洗体用施設をどうするかということ、各モスクが考えなければいけない時期に来ていると思います。名古屋モスクも、近い将来リフォームすることがあれば、こういった洗体用施設を造りたいと思っています。

最後に、サラームというアラビア語をご紹介します。平和・平安という意味です。平和に平安にドニヤーでの生活を送ることが、アーヒラでの永遠の命もまた平和で平安なものになるわけです。ですから、苦行に耐えるとか、過激な思想に走って危険な集団に参加する必要など一切ありません。ムスリム同士が交わすあいさつをご存じでしょうか。「アッサラーム・アライクム」と言います。あなたの上にサラームがありますように、平和がありますようにという意味です。アラブ人でもアフリカ人でも、インドネシア人、パキスタン人、何人でも、会えば必ず「アッサラーム・アライクム」。別れるときも、同じ「アッサラーム・アライクム」、

平和を願います。つまり1人に会えば、会って別れて2回サラームを言うことになります。10人に会えば20回、50人に会えば100回、ムスリムは1日に何度もサラームを言います。今はコロナで人に会う機会は少ないですが、それでも言います、サラーム。

先ほど、両肩に天使がいると言いました。1日5回の礼拝の言葉とか動作は決まっています、最後の動作は右の天使に向かって「アッサラーム・アライクム」、左の天使に向かって「アッサラーム・アライクム」と言って終わります。つまり左右2回ずつ、5回の礼拝をするということは最低でも10回はサラームを口にするわけです。こんなに1日中サラームサラーム言っているムスリムが、危険なはずないのですが、そういうイメージでひとくりにされがちなのが残念です。そしてそのせいで、日本はムスリムにとって生きづらく、さらに死にづらい国であることがとても悲しいです。誤解や偏見が解消されて、ムスリムもまた日本社会を構成する一員として受け入れていただけるよう、生きやすく死にやすい環境が整うよう、期待を込めてお話を終わります。皆さまにサラームがありますように。お粗末さまでございました。

司会: サラさん、ありがとうございます。これまでの日本、特にこの東海地域、愛知県でのムスリムの方たちの、ある意味歴史のようなこれまでの流れを教えてくださいとともに、なぜ火葬ではなく土葬なのかということ、私も知らなかったことがたくさんありました。ありがとうございます。そして、亡くなる時に土葬で葬ることができないという人たちがいるということ。それが地域住民からの反対によるという理由、とても残念なことだと思いますが、その中からイスラームへのイメージについても、サラさん、大切なことを教えてくださいと思います。現状が変わっていくように、そして一人一人が望む死に方というのでしょうか、弔われ方がきちんと尊重されるような社会になっていくといいと、聞きながら思いま

した。

そしてこの30年、40年で当時20代、30代だった方たちが、これから終末期を迎えていく人たちが増えていく中で、モスクの現状や、弔いを意識したモスクの在り方も、今変化の時を迎えているということを教えていただきました。

カトリック教会の場合

松浦悟郎（カトリック名古屋教区）

はじめに

教会の立場から終活を考えるということで、お話をいたします。教会といっても、プロテスタント、カトリック、いろいろあります。私はカトリックですので、カトリックの側から、信徒一人一人の終活の捉え方、そしてそれに対する教会のサポートについてお話をしたいと思います。先ほどのサラさんの話にあったように、キリスト教とイスラームは聖書で共通している部分があり、とても親近感を持って、今の話を聞いていました。最後に話された平和、サラームも、教会の中ではミサという礼拝の中で、「主の平和が皆さんと共にありますように」と唱えたり、平和のあいさつをしますが、その語源は旧約聖書からきており、イスラームのサラームと共通しています。

死生観については、先ほどのお話でもありましたように、一神教は直線的であるということでした。そういう意味では、人生の終わりが全ての終わりではなく、この世の命が永遠の命に向かうという、非連続の中の連続ということがキリスト教の死生観でもあります。

さて、終活を考えるに当たって、私はまず教会の中にたくさんの外国籍の方がおられるので、少し意見を聞いてみたいと思ひまして、簡単なアンケートを作り、外国人に聞いてみました。

アンケートの結果から

お配りした資料（画面）にありますように、ア

アンケートで尋ねたことの一つ目は、「自分の最後の時を迎えるに当たって、何か心配なこと、不安なことがありますか」。二番目に「教会にお願いしたいことがありますか」。そして、「その他望むことはありますか」というこの三つの点について、意見を聞いてみました。答えてくださったのは、6カ国、36名のかたがたです。

カトリック教会の中では毎週日曜日にミサがありますが、フィリピンの方のためにタガログ語や英語のミサ、ブラジル人のためのポルトガル語のミサ、ベトナム人のためのベトナム語のミサというように、各言語のミサがあちこちで行われていますので、急ぎよそこのミサを担当している司祭たちをお願いして、一部の人ではありますが、アンケートに答えてもらいました。それでも6カ国のかたがた、ベトナム人、ペルー人、フィリピン人、ブラジル人、ケニヤ人、そして香港の方がアンケートを寄せていただきました。

その内容を見ますと、まず彼らにとって一番心配で不安なことは、「母国との連絡や残された家族のことが心配。家族に迷惑をかける」ということで、16人の意見がありました。特に母国と離れていますので、家族との連絡やその後のさまざまなことをどうするかなどが心配ということです。また、「病気や介護の問題が不安」ということも多かったです。次にこの項目の2番目の「知り合いがおらず、寂しい。神さまにゆだねる」については私も少し心が痛みました。自分の国ではない他国に来て知り合いがいないということは、死を迎えるときにどれほど寂しいか。それだけに、その人の持つ信仰や同じ信仰を持つ仲間がとても大切だろうと思います。また、日本の教会の葬儀は一体どうなっているのか、遺体は果たして母国に送られるのか、遺灰、あるいは納骨のことが分からないというような疑問が多いです。

次に、②の「教会にお願いしたいこと」という項目では、「教会で遺骨を預かってほしい」。それから、「『赦しの秘跡』を受け、母国語で葬儀をしてほしい」という希望があります。この「赦しの

秘跡」は非常に重要な部分なので、この点については後で説明したいと思います。

「母国語で葬儀をしてほしい」。これは、「葬儀社の情報、葬儀について母国語で説明してほしい」ということとつながっています。やはり彼らにとって、異文化で分からないことが多い中でも、自分の国の言葉できちんと説明してもらえれば、それだけで安心をするということだと思います。それから、教会を通して自分の死について、遺言について家族に知らせてほしいという要望があります。自分が日本で亡くなったということや、自分がどんな思いで何を残してきたかということや、家族、国の人たちに正しく伝えてほしいと教会に望んでいました。

「その他、望むこと」としては、遺産や保険金などのことは信頼できる人に、たとえば娘に託したいということ。あるいは、自分が亡くなった後、命日にちゃんと祈ってほしい。自分のためや家族のために祈ってほしい。それから、貧しい人への葬儀代やそういった支援が欲しいなどの意見がいろいろ出ました。他にも意見があるのですが、資料には主な意見だけをピックアップしています。

キリスト教の死生観から

* 教会の関りについて

次に、キリスト教の死生観の、基本的な理解はどうなっているのかということなのですが、「キリスト教では、人生はこの世の死をもってすべて終わるのではない。死という通過点を通して永遠のいのち、救いに至るといふ信仰があるので、「死の時をどう生きるか」ということが重要になります。どのように最期を迎えるかということよりも、死という時を、人生の中で最も重要な時を、私はどのように生きていくか、つまり、この世から来世へ、神の命へと旅路を歩いていく、それが主なテーマになります。そのために教会には司祭がいて、重要な役割を果たします。カトリック教会では定期的な病者訪問をしています。もし危篤であるとか、病状が急変したなどのことがあると、信徒

は深夜であっても教会に連絡をして、司祭がそこに駆けつけ祈ります。カトリックの司祭にとって非常に重要な使命でもあるからです。

コロナがはやり始めたときに、病状が重篤な人や危篤の人を訪問し祈ることができないということが起こりました。ちょうどそのときに、教皇フランシスコが司祭たちに、「勇気を持って駆けつけなさい」と励ましたため、イタリアでは多くの司祭たちが駆けつけ、100人以上の司祭が感染して亡くなっているのです。そのため、それ以降は少し慎重になってはいるのですが、「死の時に寄り添う」ことはそれほど重要なことであるという一つの例です。

* 「秘跡」の意味

その続きを読みますが、「この世の命から永遠のいのちへの『旅路の糧』としてミサ(聖体拝領)がもっとも重要になる」。毎週日曜日に行われているミサは、イエスの最後の晩餐を受け継いでいるカトリック教会ではもっとも中心的な礼拝です。イエスが最後の晩さんのとき、パンとぶどう酒を取って「これが私である。これをずっと行いなさい」と言ったことに基づいて、ミサの中で司祭が同じ言葉で祈り、信徒はそのパンとぶどう酒をイエスご自身であると信じて頂く(聖体拝領)わけです。病人のためには常にその聖体が教会の聖堂(聖櫃)に安置されていて、危篤や重い病気になったとき、司祭はまずその聖体を持って病人の所に駆けつけます。ただし、ほとんどの場合、本人の状態や病院側の状況から、聖体をいただくことはできません。私の経験で、まだ意識があって、少し水を飲む場合に、ほんの少し(パンといっても本当にウエハースのような小さなものですが)それを切って小さなものにし、水で静かに流し込むというようなことは何度もしたことがあります。それができない場合、「病者の塗油」という秘跡を授けることになっています。これも聖書に書かれていることで、「病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい」という手紙(ヤコブ5章14節)に基づいてい

ます。司祭たちは、この「病者の塗油」のために祝福された油を持って駆けつけます。そして重篤な病人、危篤の人の人の所に行って油を塗り、今、その人にとって一番必要な恵み、もちろん、病気の回復もありますが、その苦しみの中を神と共に歩めるように神に願うというのが、「病者の秘跡」です。

* 罪の赦しについて

臨終のときの一つの重要な要素は「赦し」です。この世の命を終え、神の前に立つときのために、この世の罪を赦していただく「赦しの秘跡」を受け。もちろん危篤の場合は、ほとんどそれができないので、司祭は祈りの中でその人の罪の赦しを神に願います。

罪をどう考えるかということですが、罪とは、キリスト教では神に背を向けその道を外れていくことと捉えています。聖書の中で、キリストはたとえて、「私はブドウの木、あなたたちはその枝である」(ヨハネ15章)と語っています。その枝が幹から離れていったら、自分で永遠の命を得ることできない。だからつながっていなさい、私のところに立ち返りなさいと言っているのです。ブドウの木、すなわちキリストから離れた結果として、人は愛を失い自己中心的になり、他者を傷つけたり、悪事を働いたりするということです。このように、人は、神(真のいのち)に至る道を外れていくことによって、自らのいのちを失っていく(滅びていく)ということです。その意味で、自分たちがもう一度神に立ち返り、神につながるための「赦しの秘跡」が非常に重要な部分です。

神のイメージを「罪を犯した人間を罰する方」と受け止めている人は案外多いでしょうが(聖書にもそういう表現はある)、神は人間を救うことしか考えていない、赦そうと待っている神なので、立ち返ることが大切になってくるということです。

さて、死の準備というものは、永遠の命に向かうために行うわけですが、その永遠の命とは何かということです。それは、神と「私」が一つになる、神と「私たち」が一つになる。つまり、人は

神に背を向けて分裂したために、人と人とも分裂している。逆に、人と人が分裂するということは、神とも分裂することになる。なぜならば、愛である神が、人間を互いに愛するようにつくられたにもかかわらず、その愛に背を向けるということは、神から離れることであり、同時に人と人が分裂していくことだからです。永遠の命というのは神と私たちが一つになることであり、そのために神と和解をするということなのです。和解の完成が神の国の完成である。ということは、この世で人と人がいがみ合ったり、憎しみ合ったりしているのを赦していただくことによって、神とも和解していく。いつの日かこの世を越えて、神の前に全ての人は和解して一つになるというのが、神の国の完成となるわけです。

この世に生きている間から、それが始まっているので、キリスト教にとって、この世の分裂を和解に持っていく、争いをなくして愛し合うように持っていくというのは、神の国に向かうということと同じ。それがこの世を越えて、いつか完成するということです。そういう意味では、「赦しの秘跡」は、そこに向かう非常に重要なものです。

* 復活の希望について

それから②のところですが、キリスト教ではこの世でどう生きたかが非常に重要であって、どのような葬りをしたか、骨をどうしたかというようなことは、直接救いには関係がないということです。その人が生きている間にどう生きたかということが、重要なわけです。亡くなった場合に、何日後に祈らなきゃいけないのか、あるいは事情によっては葬儀ができないけれどもいいのかとか、自分の骨はこうしたいのだけど、などとよく聞かれますが、どのような形でもいいわけです。ただ、亡くなった人はいなくなったのではなくて、神の元で生きているという信仰なので、その人との関係は亡くなった後も続いていくことから、その人を記憶し、その人と共に生きるという「しるし」として、目に見える葬儀であったり、納骨であったり、お墓で祈るとかいうことはとても大事なこ

ととして続けられています。

特にお互いに祈り合うということが、キリスト教では重要です。その意味で、毎日世界中の教会でミサが行われていますが、その中で、全ての死者、あるいは身近な人の死者のためにも必ず祈ります。他に、食事の前と後にお祈りがあるのですが、伝統的に食後の祈りに、「どうか、亡くなった人々がみんな救われますように」というような言葉が入っています。というのは、聖書では、神の国の完成を食事（宴会）で表現することが多いですが、確かに私たちにとっても親しい人と食事をするということは、深い交わりと喜びがあるだけに、そこが欠けた時、つまり、食事のときに、愛する人が亡くなって共にいない時に痛切にさみしさを実感するからです。けれど、そのさみしさは必ずいつの日かまた神の元でみんな一緒に集うことができることを信じ、希望するために食事ごとに思い出し、祈るのです。新しい食後の祈りでは「死者」ではなく、「全ての人の幸せを願いながら」という言葉に変わっていますが、亡くなった人も含まれています。

ところで、土葬のことですが、実はキリスト教も長い間、土葬をしていました。信仰宣言の中に、「からだ」の復活を信じるという言葉があります。だから、体を焼いてはいけないと考えられていました。しかし、「からだの復活」というのはいわゆるこの世の肉体がそのまま蘇生するという意味ではない。私はそれを示すために、「からだ」と平仮名で書くようにしています。「からだ」とは、私自身ですよね。私自身は心と体（肉体）が分裂しているのではなくて、今いる、体を持っているこの私。肉体としての体は新陳代謝によってすべて代わってしまっていますが、この私は生まれたときも亡くなる時も同じこの私、また亡くなってからも同じ私であるという意味で「私自身=からだ」というように捉えたらいいでしょう。私自身が復活するということを信ずる。必ずしも肉体が蘇生するということではないので、基本的には土葬か火葬かということは、キリスト教では大きな問題

ではありません。

ただ、信仰上、土葬でなくても良いとしても、すでに土葬が習慣になったいる国では、今も土葬が続いています。以前、私も頼まれてエンバーミングをして、本国に遺体を移送するお手伝いしたことがあります。それはやはり、一人一人が大切に思っていることを尊重するという意味で、教会がお手伝いをするのは非常に重要なことです。

* 終わりに

最後に、今回このテーマでアンケートを採ってみて感じたことは、私たちは最終的にキリスト教の死生観に基づいて、どのように終活をすればよいかについて考えますが、当事者たちにとってはそれ以前の問題、すなわち自分の葬儀はどうなるのだろうか、あるいはどのようにやれば家族に伝わるのだろうかという具体的な問題がかなり切実であるということです。彼らが日本の社会の中で孤立している場合に、それが大きな不安というものにつながっていくということがよく分かります。アンケートの回答を読んでみて、教会としてのサポートが足りなかったことを知り、申し訳なかったと思うし、教会はもっと終活の問題に関わらなければならないということに気付かされました。これからは、今回のアンケートの内容を教会の中でシェアしながら、それぞれが自分の問題として、どのように最後の大事な時を生きていくか、そのために教会として何ができるかについて取り組んでいきたいと思いました。以上、報告を終わります。ありがとうございました。

松浦さん、ありがとうございました。カトリックの死の時をどう生きるか、死の準備について、知らないことがたくさんありました。たくさんのことを教えていただいたと思います。そして、松浦さんはカトリック教会を中心にですが、全国的に移住者、難民の支援を長年続けていらっしゃる方でもあります。このカトリック教会の中で移住者の方たちが安心して日本で暮らしていけるよう

にと、亡くなる時の不安を少しでも減らしていく、心配事を抱えて不安になることがこれだけあるということ、今回認識したということをおっしゃっていらっしゃいました。しかし、教会の中からまた考えるという、変化をしていくきっかけになったというお話だったかと思います。ありがとうございました。

葬儀会館でのお葬式

鵜野智教（株式会社ティア）

今回このような異文化の終活を考えるセミナーということでご依頼をいただきまして、今までサラさんや松浦様から、いわゆる宗教観から見たところでの終活のお話いただきました。われわれ葬儀会館というところは、ほとんどが日本人の方のお葬式のお手伝いをさせていただいている会社です。今、一般的にどのようなお葬式というものが、日本で行われているかというところをご紹介させていただきたいと思います。

昨今、お葬式といっても家族葬という言葉が、非常に多く、CMもメディアも取り上げておりまして、家族葬という形のご葬式をされる方が非常に多くなっておりまして、家族葬の概念とはというところで申し上げますと、こちらにも記載させていただいておりますが、家族葬は、少人数の参列による葬儀です。家族葬という言葉は、ある葬儀社が規模の小さな家族中心の葬儀という意味合いで使用したのが始まりです。

葬儀の形式や宗教形態を規定するものではありません。そのため、家族葬に明確な定義はありませんが、参列者を呼ぶことはなく、ご家族やご親族、親しい友人を中心とした少人数で執り行います。基本的に必要なことや式の流れについては、一般的なお葬式と何ら変わりはありません。

よくお話があるのが、家族葬というところで、ここにも記載させていただいておりますが、「誰を呼べばいいんですか」、「どこまで呼べばいいんですか」

か」というご質問を、たくさんいただきます。こちらについても明確な定義がなくて、どちらかというと、家族葬というと呼ぶ範囲を決めるというのが基本的には家族葬というように、われわれは皆さまにお話をさせていいただいております。正直申し上げて、われわれの葬儀会館で行う家族葬の中で、50人規模、70人規模の家族葬もあります。逆に5名ほどの家族葬もあります。これは親戚だとか、ご友人、呼びたい方の人数によって変わってくるものだと、われわれとしては認識をいたしております。

それに伴って一般葬という言葉、この逆ですね。今まで行われていたようなお葬式になるのですが、こちらについては今、一般葬っていうような言い方しております。こちらの一般葬は本当に逆です。お葬式がありますということを、いろいろな形で皆さんにお知らせして、ご都合が合う方に来ていただくものです。一般葬はご家族やご親族、親しい友人をはじめ、ご近所にお住まいの方や、故人の勤められた会社、また故人と生前に関係のある方を呼ぶ必要があります。もう一つ申し上げますと、昔であれば喪主さまであったり息子さま、また奥さまであったり、配偶者の方の関係の方も来られる。それが、一般的なお葬式という定義をさせていただきます。いずれにしても、故人の在りし日の思い出をゆっくり語り合う場ということで、それまで歩まれた歴史を垣間見ることができるよう祭壇であったり、またお人柄を表す装飾などを施すことであったり、思い出も弾み、それまで気付かなかった故人の一面を知ることができるのではないかと考えております。今はほとんど葬儀会館で行われている葬儀、お葬式につきましても、この家族葬か、一般葬という形で行われているのが、現状でございます。

もう一つ密葬やお別れ会や社葬、合同葬などというものもあります。これは4番から6番に関しては、どちらかというと事業者さまが行うお葬式になります。お別れ会というのは、亡くなってから四十九日、大体2カ月ぐらいまでの間に行われ

る、お葬式という、火葬が終わってからのメモリアルなお別れ会でございます。社葬については、どちらかというと宗教儀礼を伴った形で、火葬後に行うものになります。合同葬というのは、故人葬と社葬を合わせて、ご遺族と会社が共同になされる葬儀で、これは一般的に普通の葬儀です。亡くなられてから数日後に行われるというのが、一般的でございます。3番の密葬というのが、いわゆるお別れ会や社葬をする方が、家族だけで簡単なお葬式をするものです。これが密葬と呼ばれるものでございます。

最近、メディアでも、いろいろなところでも、また当社にご相談で来られる方の中でよく出てくるワードが、直葬とか火葬式という言葉がございます。これも多分ある葬儀社が作られたもので、特に概念というものは無いのですが、基本的に直葬というのは、病院で亡くなられてから、そのまま火葬場に行くという考え方が直葬でございます。これは、何かと申しますと、日本においては、病院で数日間、お預かりする施設がありませんので、ほとんどにおいて病院で亡くなられてから、いったん葬儀会館やご安置する施設、もしくはご自宅でご安置をしてから、火葬場に移動するという形が直葬となります。日本の法律では、死亡診断が出されてから24時間後でないといふ、火葬ができないというルールになっております。時間によっては24時間以上たつてからの火葬になるケースがございますが、直葬というのは、ほとんどが、お別れの場を設けずに、そのまま火葬場に移動して火葬するという、特に宗教儀礼もあまりないような形のものとなります。

あと、それに似たような形で、火葬式というような内容のものも、昨今いろいろなところ出ていますが、こちらもほとんど似たような形でございます。極力宗教儀礼のないような形で、ご出棺するときだけに簡単なお別れの場を設けて、そのままご出棺するというようなものが火葬式となります。弊社、愛知県と、また大阪と関東でも事業展開していますが、愛知県においてはまだ火葬

式、直葬というものの比率が少なく、それでも15パーセントぐらいまできているといわれております。

関東や関西におきましては、これが非常に高くなってきているような状況が、今のいわゆる日本の弔いになっています。関東におきましては、一時、コロナの感染者がたくさん出ていますが、コロナになってからは25パーセントから30パーセントぐらいが火葬式・直葬というような形が、今の実態ではないかと思っております。大阪も似たような形になっていると思います。これがまた、地方のほうに行くと比較的まだ一般葬であったり、家族葬という形であったり最後、お葬式を実施している方が多いのではないかと思っております。名古屋においても、一般葬と家族葬の比率でいきますと、8割方が、家族葬という状況になっている、今の実態でございます。家族葬といいますが、先ほど冒頭に私、お話しさせていただいたとおり、70人の方もいらっしゃれば、50人の方もいらっしゃるの、最後の形というのはそれぞれで行っているのが現状でございます。

続きまして、お葬式の種類っていうのは、先ほどのものをまとめたものになります。火葬式というのは、こういう方たちを呼ばれているケースが多く（いすよとか）、家族葬はこういう方たちが呼ばれていて、通夜、葬儀、初七日、火葬とありますけれども、この部分だけ、丸の付いた所がご参列されるケースが多いというような形になっております。今はほとんど家族葬という形で、喪主さまや家族、ご親戚、ご友人の方も少なく、10名から20名ぐらいの間で最後のお見送りをするケースが多いのではないかというのが実際でございます。

お葬式の費用に関してだけ簡単に申し上げます。費用については、お葬式費用一式という、飲食費とか会館使用料、宗教者のお礼料で、大体構成されております。最近CMで、当社もそうですが、新聞折り込みのちらし等で幾らと書いていますが、そちらに関しては大体この葬儀費用一式

と呼ばれている部分が、表示されている価格だと思っただけであれば結構でございます。いわゆる、当社であれば、葬儀費用一式というものと会館使用料金を合わせた金額が33万円でございます。

葬儀費用一式とは、お葬式に必要なサービス物品や、式場使用料であったり、宅送料であったり、これは病院から搬送させていただくお車代になります。宅送のお布団ですね。あと、湯灌の儀が入っていたりとか、仏衣とかお礼状関係、保冷剤、消臭・防腐剤であったり遺影写真、霊柩車、お棺、司会代など入ったものが葬儀費用一式といわれております。その他、飲食費、返礼品というのは、来てくださった方、たとえば家族葬であっても、ご親戚の方にはお料理を振る舞ったり、また返礼品というようなお品物をお渡ししたりすることがあります。家族葬であっても、こちらに関しては発生する形になります。あとは会館使用料、宗教者のお礼料となっております。正直申し上げて、それぞれの宗教によってお礼料は変わってきますので、われわれが介在することは少ないので、幾らぐらいかと言われても、宗教者の方とお話ししてくださいという形が多いです。ただ、昨今、日本人の場合ですと、宗教者とのお付き合いがかなり希薄になっているケースが多いので、当社より宗教者の方をご紹介するケースも、多くなっているというところでございます。

いろいろお話ししてきましたが、今回、外国人の方も含めてというところのワードについても、少しお話をさせていただきます。当社が今グループ全体で、年間、大体1万8000件ぐらいのお葬式を、お手伝いをさせていただいていますが、そのうち外国人の方のお手伝いをするケースは、ほとんどありません。あったとしても、宗教観のない方がお別れだけをしたいというところで、お手伝いをさせていただくケースがほとんどとなります。どういう形のお葬式をさせていただいているかというと、いわゆる無宗教葬であったり、先ほどご案内させていただいた直葬であったり、火葬式というようなものを、ご案内し、お手伝いをさせて

いただいているということが多いです。

先ほどサラさんからお話もあり、松浦さんの中でもありました、エンバーミングですね。いわゆるエンバーミングというか、海外搬送する場合も、弊社がお手伝いをさせていただいております。弊社の場合には大阪と名古屋にエンバーミングセンターが1施設ずつありまして、そちらでエンバーミングを施してから海外搬送する。先ほどサラさんのお話の中にもありましたけど、大使館とのやりとりとか、結構面倒くさいことがありまして、そこも弊社のほうで全て対応させていただいて、向こうの葬儀社とやりとりをするという形になります。空港へ迎えにきてもらうところまで、弊社のほうでお手伝いをさせていただくということも、まれにあるのが現状でございます。

葬儀の核家族化もそうですけれども、われわれが今直面しているお葬式の形態から申し上げますと、家族葬がここ近年、特にコロナが急激に増えてからですが、やはり呼びづらい環境になってきていると思います。家族葬でも小さくなってきているところが、非常に多くなってきております。3年前、コロナ前の時点では、家族葬も多かったのですが先ほど申し上げたように70人、50人の家族葬。ほとんど一般葬と変わらないようなお葬式が、非常に多かったのです。これがコロナになって、われわれが思い描いていたというか、多分こうなるであろう10年後のお葬式は、このままいったら、簡素なお葬式が増えてくるのではないかという話を、同業者も含めて話していたのです。これがコロナによって一気に、10年後のお葬式はこんな感じだろうというのが、今現在のお葬式の事情であります。

あと、昨今のトピックスでいいますと、コロナに感染された方のお葬式が、非常に多くなっている。お亡くなりになっている方の数も、ちょっと前に比べて増えております。当社もお手伝いしている数が、名古屋エリアにおいては非常に多く、3年前に志村けんさん、某芸能人の方たち、岡江久美子さんも含めてですが、取り上げられており

ました。現状でも同じような形になっております。特にこういうふうになってきたからといって、普通にお別れができるのではないかと。そういうことはありません。これはメディアでも問題点で挙がっているように、2種とか5種、インフルエンザ並みという部分で、2種については基本的にはこういうお葬式をなささいという形で国からお話があるので、われわれはそれにのっとってやらせていただいているというところですよ。

もう一点、お葬式において、なぜそのような形にしているのかというところがありまして、これは亡くなった方自体は、息もしないから大丈夫ではないかというお話もあります。ただし、お見送りする方に関しては、コロナ感染をしている方である可能性が非常に高い。あともう一つは、濃厚接触者であるという可能性も非常に高いので、われわれは基本的にはその方たちと打ち合わせをすることが多いため、どちらかというところそういったリスクで、あのようなお葬式になっていると、ご理解いただければと思っております。

なぜそうなるかと申しますと、当時コロナがはやったときでも、保健所からは当然、個人情報の概念から、この方たちが濃厚接触者であるとか、この方たちがコロナの患者さんであるという情報を流すことができないのです。われわれはご参列いただいている方や、また打ち合わせをする方たちが、どういう方なのかという情報を得ることができないので、致し方なくそういう形になっているというのが現状でございます。ただ、先ほどエンバーミングというお話がありましたが、エンバーミングをしてお別れをする場合もあります。そうすることによって、故人さまから、何かしらうつるというリスクは極力なくなるので、お別れが比較的やりやすいような環境になります。こういったお葬式をされる方も昨今は増えているような状況になっているというところが、葬儀会館での現状ですね。

これからどうなるかという、最後のところですが、やはりわれわれが最後のお葬式というところを見

ていて、お手伝いをさせていただいている会社ですから、特に皆さんのそういう宗教観などいろいろ概念を、われわれが推し進めるということはまずありません。ただお手伝いをして、最後の悲しみだとか、そういった部分を少しでも和らげるようなサービスができるということが、唯一われわれのやるべき仕事ではないかというところで務めさせていただいています。家族葬が非常に増えてきている現状がありますので、お葬式自体というか最後のお別れの部分も、そういう意味ではちょっとさみしくなってきたのが、われわれ葬儀社にとっても何か気持ちの部分でさみしい感じになってきているというのが残念でなりません。

そういう意味では、事前にご相談される方も、この「終活」というキーワードの中で増えてまいりました。事前に相談される方に関しては、弊社の事前相談の中でお葬式の在り方、せっかくであればいろいろな方を呼んでさしあげるということも大切でしょうし、最後のお別れをあまり宗教観にとられるようなお話をする立場ではないので、立ち入ったところまでお話しはしませんが、極力、故人さまから見て大切な人を呼んでさしあげられるのも、大切なことではないかとお話をさせていただいております。とりとめもないお話になりましたけれども、われわれ、葬儀会館という立場でお葬式に携わらせていただきました現状を、皆さんにちょっとお伝えしたというところでございます。

司会：鶴野さん、ありがとうございました。日本の中でも葬儀の在り方が変化してきているということで、特にコロナの影響は大きいというお話だったのですが、外国人のケースはほとんどないということで、皆さまモスクや教会や、それぞれのところで執り行っているのか、どのような現象になっているのかということをお願いしながら、聞かせていただきました。海外搬送というのも、私はよくフィリピンの方たちと接する日本人の方や病院関係者の方から、海外搬送を希望されているが、どこに問い合わせたらいいのかという問い合わせや相談をよくいただきます。ティアさんの

ほうでもそういう対応されているということ、実は私、今初めて知りました。ありがとうございます。

質疑応答

司会：まず、サラさんにご質問です。埋葬された後の、仏教でいうところのお経をあげたり、法事をしたり、お墓参りをしたりということ、ムスリムの方はそれに代わるようなものはどのようにされているのですか。何が必要ですか。

サラ：私自身あまりよく分からないのですが、女性はお墓参りの習慣がないので、行ってはいけないということではなく、ご家族のお墓参りをされている女性の方たちもいらっしゃいます。と言っても、日本のようにお盆だからこの日に行かなければというのではなく、行きたいと思ったときにいらっしゃっているようです。何回忌とか何日目とかってということもなく、皆さんご自身の気持ちで行きたいときにいらっしゃるという感じだと思います。

司会：お経をあげるような、何かお墓でお祈りをするみたいなことはありますか。

サラ：私自身が行ったことがないので、何とも言えないのですが、例えば清水霊園なんかは礼拝用の施設があるようなので、そういう所へ移動されるのではないのでしょうか。お墓の前でということではないと思います。

司会：サラさんにもう一つ質問です。テレビや写真などでは、イスラームの礼拝のとき、男性の姿しか目にしません。女性は礼拝や葬儀へどのように参加しているのでしょうかということで、今のお話と関連します。

サラ：女性も男性と同じように参加しています。テレビや写真に映りたくない方も多くいらっしゃるので、多分カメラが入ってこないだけなのでは

ないかと感じます。葬儀の礼拝＝ジャーザのときも、同じように女性も参列しますし、特に何の違いもないです。ただ、名古屋モスクはとても小さなモスクで狭いため、参列者が多くて同じフロアに入り切れない場合は、階を分けて、女性は2階の礼拝室で、男性は3階の礼拝室でということになります。別に女性だから何々してはいけないということは全然ないです。

司会：テレビや写真でこのご質問をしてくださっている方が、男性の姿しか目にしないのは、たまたまでしょうということですか。

サラ：たまたまというより、女性の礼拝している所にカメラが入りにくい環境があるのかもしれないですね。先ほどウェブ上から拾ってきた体を洗っている写真をお見せしましたが、男性しか写っていませんでした。女性も同じことをしていますが、そういう写真はなかなか出回らないんだと思います。礼拝のシーンも同じで、どうしても男性ばかりが目につくかもしれませんが、女性も同じようにやっています。

司会：今の名古屋モスクでフロアが分かれているというお話は、人が多いときは男性と女性と別スペースで。

サラ：狭いのです。17坪の狭小地に造ったモスクですので。例えば海外で、マレーシアのモスクなどは大きいので、ワンフロアですと前のほうに男性が礼拝して、女性はその後ろのほうで礼拝するという所もありますが、残念ながら名古屋モスクはそういう余裕がありません。フロアを分けて、礼拝を先導するイマームの声はスピーカーの音を聞きながら礼拝することが多いです。

司会：では、次に松浦さんにご質問ですが、教会には多様な国籍の方が通っていらっしゃると思います。葬儀や埋葬に関して、国ごとに特徴はありますか。この国はこういう要望が多いとか、この国の方はこういう困り事が多い。例えばこの国の方は母国に遺体を送ってほしいという要望が多いというような特徴はありますか。

松浦：いろいろな国の方々のいろいろな気持ちがあるでしょうが、カトリック教会の中で葬儀をする場合、一番大事なのはミサの中で祈るということです。教会で葬儀ミサをして、司祭や信徒の皆さんに祈ってもらうことが、どの国の信者にとってもでも共通して重要なことなので、それが満たされると、基本的には喜んで受け入れていると思います。ただ、それぞれの国にはやはり文化があり、遺体を土葬する国では、家族の人たちはどうしても本人に会いたいという気持ちが強いし、宗教的な意味よりも国の習慣によって、どうしても遺体を送ってほしいという要望もあり、私も何件かお手伝いしたことはあります。

最近では、コロナで交わりができないし、遺族が日本に来ることもできないというようなことがあります。逆に、オンラインが発達してきたので、可能性が広がったケースもあります。先日も、日本に住んでいるフィリピン人男性のお母さんがフィリピンで亡くなっても帰ることができなかったのですが、オンラインで最期のときにお母さんと直接話すことができ、また亡くなった後、葬儀ミサからお墓に行く行列まで、全部日本からリアルタイムで一緒に祈ることが出来たので、彼はすごく落ち着き、喜んでいました。そのことを思うと、いろいろな事情で遺体を送ることができなくても、オンラインでつながるという選択肢が増えたことは、とても良い助けにはなると思いました。

司会：コロナで実際に会うことは難しいけれども、コロナがきっかけとなり、オンラインで最後の時を過ごすことができたということも増えてきているということで。何か国ごとの特徴というのはありますか。フィリピンの方はこういうように、ベトナムの方はこういうようにというものはありますか。

松浦：今までいろいろな国の人たちの葬儀も行いましたが、葬儀に関してはあまり要望はないですね。むしろ結婚式のほうがあります。その国の習慣に従ってロープを付けたり、式の中でもいろいろしたりするのですが、葬儀の場合はやはり世界

中、カトリック教はどこでもミサで祈ることが中心だし、そのミサの内容は決まっていますから、その中で何か特別なことをするというのもほとんどありません。日本で通常行われるお通夜、お葬儀、告別式というパターンについては、お通夜の習慣があまりないとか、あるいはお通夜をもっと長くするとかというのは時々ありました。

司会：結婚式の場合はいろいろありますが、葬儀については、基本的なミサという共通のところが満たされれば、それが基本。それ以上何かということは、ないということですね。ありがとうございます。

司会：では次に、鵜野さんにご質問ですが、海外出身の方の海外搬送を行う際に、現地の葬儀社とやりとりをされるというお話があったと思いますが、具体的にやりとりがある国はどういった国でしょうかという質問です。現地の葬儀社とのやりとりをされるというわけではないですね。

鵜野：すいません。私の言葉足らずだったと思うのですが、現地の葬儀社と行うというわけではなく、大使館を通じて、空港まで来てもらうところの現地の大使館とのやりとりですね。最終的に向こうの葬儀社ないし搬送会社に来ていただいて、空港までの段取りで空港から搬送するところまでをわれわれがお手伝いさせていただくところになります。頼まれたらやるしかないんで、何とかするというところですね。

司会：現地の葬儀社とやりとりするのではなく、国内で大使館とやりとりをして、国内からお送りするところまでを担われているということですね。

鵜野：お手伝いさせていただくところになります。

司会：今までそういう依頼というのは、どのくらいあるのでしょうか。

鵜野：年に数件ですね。

司会：国の特徴はありますか。

鵜野：特にないです。弊社も2019年にエンバーミングセンターを開設してからになるので、まだ数

年のお手伝いになります。お手伝い自体も年に数件です。

司会：では、もう一つサラさんにご質問です。名古屋モスクでは、代表の方がご遺族から亡くなったという連絡を受けて、葬儀の手続きが始まるのですが、名古屋モスクで葬儀をする方は、名古屋または愛知県在住の方が多いのですか。あるいは、もっと広範囲に及んでいるのでしょうか。

サラ：ご依頼があれば、どこでもお引き受けするしかないと思います。そのまま放置はできませんから。先ほど日本にモスクが100以上あると申し上げましたが、100カ所全部でこういったジャーナザをやるかという、それは難しいです。その理由は、ひとつには洗体のための場所が確保できるかどうかという問題ですね。それから、ご遺体の洗い方を知らない方も少なくないということがあります。名古屋モスクでは、マレーシア人やインドネシア人のご経験のある方たちが日本人女性向けに、ジャーナザの勉強会を開いてくださっています。人形を使いながらこうやってやるというような勉強会を何回か開いてくださって、みんな洗い方を覚えていくので、急をお願いしても対応できる人は多いです。洗体の場所がないとか洗い方をご存じの方が少ないとか、そういうところからご連絡があれば、名古屋モスクを使っただけの方じゃなくてもお受け入れしますし、あるいはそちらのモスクに伺ってということもします。確か6月ぐらいにも、うちのイマームが西尾モスクに行きましたし、去年うちの代表とイマームが春日井モスクに行ってジャーナザのお手伝いをしたと記憶しています。行ける範囲であれば、呼ばれば行きます。

司会：すごいですね。日常からというか、普段から全然分からないということがないのですね。皆さん、普段から勉強する機会があるということですね。

サラ：いつか回ってくるからです。こういう形で自分たちもやっている、そうすることで自分

たちもいつか死んだときにやってもらえるという、そういう感覚があるので、皆さん積極的に勉強会へ参加されます。やり方はわからなくても、その方と面識があってもなくても、誰かが亡くなったという連絡が回ってくると取りあえず駆け付けるという方たちも多いです。洗い方が分からなくても、先ほど言ったカファンという白い布を用意したり、樟脳をつぶしてまいたりくらいなら誰でもできるので、そういうお手伝いをするだけでも、少しでもそういう場に参加したいとお考えの方が多と思います。

司会：お互いさまではないですけども、いつか自分も、だから、みたいなものが普段からあるというのは、すごいことだと、今思いました。お答えとしては、この地域以外の方も依頼があれば、葬儀を行うということですね。数としてはどのくらいありますか。愛知以外の方でお願いします。

サラ：要望があればということです。電話があると、夫が動く、あるいは事務の者が手配します。私自身はその手配をするわけではないので、正確な数については分かりませんが、幾つかそういう事例があったという話は聞いています。

司会：もう一つこれもサラさんに向けてなのですが、せっかくなので木下さん、中国の方がどうなのかと、もしお答えが可能であればですが、生前にご自身の葬儀や埋葬に関して相談はあるかということで、イスラームの方たちはどうなのか、あとカトリックの教会ではどうなのか。日本の社会では恐らく多いと思うのですが、どうでしょうか。中国の帰国者の方を中心としたコミュニティで、ご自身の葬儀についてお互いに相談することがあるのかどうかを、順番にお伺いしたいと思います。

サラ：日本人は、お葬式代だけは確保しておくことをよく聞きますが、イスラームでお金がかかります。モスクでは皆さんがボランティアでやっているので、お金の心配はまずないとは思いますが。ただ海外搬送となると、百何十万というお金がかかるので、それを用意されてい

る方もいらっしゃるかもしれません。

実は私、この発表をするに当たって、アンケートを募ったのです。松浦神父さまのほうでは37の方がアンケートに答えていらっやって、すごいなと思ったのですが、私が行ったアンケートは12人しか答えが返ってこなかったのが、今回発表しませんでした。アンケートでは、死ぬ前の準備を何かしていますかという質問に対して、12人中8の方が何もしていないと答えていました。これからするつもりはありますかという質問にも、5人がノーと答えていました。準備というか、事前に相談をすることすら考えていないという方たちが多い気はします。「死んだ体はどこに埋めてほしいですか」という質問に対しても、日本と答えた方が2人、ご自身の国へという方が5人、あとはどこでもいいという方たちです。特に準備しなければということがないのだと思うのです。

それは、先ほどお見せしたような四つの過程がジャーナザには決まっています、それに皆さんが何らかの形で参加している。体を洗えなくても、先ほど言ったように布を広げるとかあるいは運び出すとか、ただ礼拝に参列するだけという形でも、どこかで関わっているの、こういうものだと分かっていると、自分のときに対する不安がそれほどない。私自身も、何度かご遺体を洗っていますから、私も死んだらきっと誰かが洗ってくれるだろうと、何とかなるだろうと思っているので、大した不安もないです。

ただ、先ほどお話ししたように、コロナで亡くなったタレントさんが焼かれて骨になって帰ってきたという報道を受けて、それを心配されてどうなるのでしょうかというようなご質問はありました。それ以外では特にモスクでのご相談はないですね。外国の方からも、日本の方からも。

死が遠い存在ではなくて、かなり日常の中にあるものなので、死自体を恐ろしいものとして受け止めていない。先ほども申し上げましたが、不安をそれほど感じていないので、一つの通過儀礼のようなもので、順番にやってもらえるのだろうと

いう程度です。だから、どこに埋めてほしいという希望もなく、きっと誰かがどこかへ運んでくれるのだろうと安心しているんだと思います。ただ、日本という状況で火葬されてしまったらという不安は、皆さん大きいと思います。ご相談があったらそこだけですね。

司会：火葬を望まないというところが、大切にされるようになっていかなければいけないと思います。ちなみにその 12 人のアンケートを答えられた方は、文化背景はどうなっているのでしょうか。

サラ：国籍はインドネシア、マレーシア、バングラデシュ、それからモロッコなど、いろいろです。モスクも教会と同じで、いろいろな国籍の方たちがいらっやっていますので、たまたま 12 人の答えてくださった親切な方たちが、インドネシアの方が多かったという気はします。

司会：皆さん海外出身の方でいらっやいますか。

サラ：キルギスタンという、すごく珍しい国もありますね。日本にルーツのある方ではない。海外出身の方たちです。この 12 人はたまたまそうですね。

司会：では、カトリック教の場合は、事前の葬儀の相談はありますか。

松浦：名古屋教区（愛知、岐阜、北陸 3 県）に 50 くらい教会があるのですが、私、立場上、小さな教会を含めて、毎週日曜日に訪問しています。ミサの後で皆さんに、「何か質問がありますか」と聞くと、葬儀のことなどについて、かなり質問が出てきます。何が一番大きいかというと、カトリック信徒は家族の中で自分だけだという家庭がほとんどなのです。家族全員がカトリック信徒という信者ということは少ないです。そうすると、自分が亡くなったときに、その家は仏教ですから、お坊さんが来て葬儀をするし、お墓も先祖代々のお寺にあるという心配がすごく多いですね。どこに行ってもそういう質問が外国人も日本人からも出

てきます。

先ほど話しましたように、どういう葬りをしたか、どこで葬儀をするかによって救いが決まるのかということではないので、家族が長い間大事にしてきた仏教なら仏教の信仰の中で、お寺さんを呼んでやるなら、そうしてもらって良いと答えています。ただし、教会は、必ずどの信徒もどこかの教会に所属していますから、共同体、つまり教会はあなたのことを絶対忘れない。あなたが病気的时候に亡くなられたら、例えば葬儀はお寺ですけれど、後で、教会でその方のためにみんなでミサで祈るので安心してくださいと。あるいはお墓があるお寺で、仏教徒の先祖のところへ祭られている。別にいいじゃないですかと。どこで葬られても自分の信じる神さまのところに行くのですから大丈夫ですよ。

一方、教会は教会として墓地や納骨堂を持っているので、あらかじめ個々の納骨室を購入し、先祖の墓とは別に分骨をして、教会の納骨堂入れる人も多いです。家族の中で、誰か娘とか息子が信徒の場合は、教会として定期的に祈る場に参加できるので、とても安心し喜ばれています。そういう意味では、家族で 1 人だけクリスチャンという場合、不安があるので、教会がしっかり関わって祈り続けることを伝えることが大切だと思います。

司会：そういう方にとって、どのように弔われるにせよ、教会はきちんとあなたのことを忘れませんよというのは、すごく大きな安心というかメッセージですね。海外の方の場合で、そういうご相談を受けたことはありますか。

松浦：外国人の場合、何件か受けたのは、自分たちの国の人たちのお墓とか納骨堂を教会として造ってくれないかと。もちろん、その人もいつも通っている教会の墓地があるから、そこに入ってもいいけれど、やはり自分の国の言葉で名前と共に聖書の言葉が書いてある、そしてペルー人ならペルーの人が、ブラジルならブラジルの人がそこに集まってお祈りしたいし、本国から家族が来た時に分かるようにしてほしい。だから、何とかでき

ないかという願いが出ているので、今後の課題として、今考えているところです。

司会：ということは、自分のコミュニティ、自分の同胞で共同墓地を持ちたいという声が増えてきている。それは先ほどおっしゃられた、フィリピン、ペルー、ベトナム、それぞれのそういう要望がありますか。ベトナムでも比較的若い方が多いですよ。

松浦：短期滞在の実習生の若い人たちや、逆に2世、3世までいるフィリピンの人からは日本人と結婚している人が多いからか、あまり聞かないのですが、ペルーの人、ブラジルの人からは聞きます。カトリック信徒の外国人は、自分の近くの教会に所属はしているのですが、ただ月に1回、2回、ポルトガル語のミサがあれば、そこにたくさんブラジル人が集まりますし、その国のコミュニティもまたあるのですよね。そうすると、自分の所属する教会の人たちだけでなく、同じ国のコミュニティの人たちが祈ってくれるということが、大きな支えになるという意味で、自分たちの墓地や納骨堂があればという思いだと思います。

司会：なるほど。年代も多分、ペルー、ブラジルの方は90年代の初めに、20歳、30歳でいらっしゃっている方が高齢期を迎えているということも大きいのかなと思いつつ聞かせていただきました。

司会：では、日本の場合の事前の相談。今のお話と比較するといいのかと思いますが、いかがでしょう。どういう理由で事前の相談が多いかというところを教えてください。

鵜野：日本の場合は、地域によってさまざまではあると思うのですが、愛知県に限ってのお話ですと、かなりの確率で事前に相談される方が多くなっています。ただ、いつ相談に来られるかというところなのですが、2パターン、当たり前ですがありまして、ご自身がご自身のために相談に来るパターンと、送る側の方が相談に来るパターンが二つあると思います。ご自身の場合は、ちょっと

体が悪くなったとか、あと何らかのきっかけで来られる方が多いです。70代の方とか60代の方もお見えになるので、その方たちのご相談はお金を幾ら残しておけばいいのかというものが多いです。

あとは、われわれに相談するというお話なので、宗教観のある方は多分お寺さんなり、その宗教の方に相談されると思うのですが、われわれに相談するとなると、宗教をどうすればいいんだという、ご相談です。「ティアさん紹介してくれるの」とか、そういったご相談も。じゃあ、「幾らかかるの」とか、万が一のとき、どうすればいいんだとか。お電話いただければ大丈夫ですよということです。あとは、「何か準備しとかなきゃいけないことがあるの」とか、聞けば聞くほど、まずは生の部分をどのようにするかが大事なことなので。終活っていうと、当然相続のことも関わってくるので、そういったご相談を、ご本人のときにはすることが多いです。あとは供養のことですね。お墓のことなどもご心配されている方もたくさんお見えになるので。最近ですと、納骨は海にまいてくれればいいというようなお話も、中にはあります。

もう一方の残された方、残されるだろう家族からのご相談は、何かしら事が起こったときです。お母さま・お父さまが倒れたとか入院したとか、ちょっと急変したとかというタイミングです。ご相談から葬儀までの期間が非常に短いケース。でも内容は同じです、ほぼ。やはりお金と、何をすればいいか、からですね。そんな短い期間で。特に愛知県の場合ですと、お亡くなりになってからお通夜、お葬式が、翌日か当日にお通夜をするケースが非常に多いので、短い期間でちゃんと段取りしてくれるのかとか、そういうことも含めてのご相談が多いです。「私の宗教ってなに」とかですね。

司会：それはどんなふうにご相談には乗られるのですか。

鵜野：まず、お墓がありますか、おうちにお仏壇がありますか、ご実家にお仏壇がありますかと。お仏壇の中に入っている、例えば仏教の場合です

と、お位牌はというもの、お仏壇の中にありますので、これが宗教によって、大きく二つに。お名前を聞けば、大体分かるので。それで導き出すことが多いです。お父さん・お母さんがどんなお話ししていたかとか、ご実家の菩提寺はありますかとか、そういったところをお聞きすることが多いです。

ただ一番は、われわれがきちっと供養のことになったときにヒアリングするケースは、お墓が今あるのかなのか、どこにあるのかです。仮に先祖代々のお墓に入りたい。そのお墓が菩提寺さまのお墓の境内にある場合は、そこのお寺さんをお願いしなければいけないのです。それを忘れていると入れなくなるケースもありますので、お名前も当然そこのお寺さんに付けてもらわなければいけない。そこですね、しっかり聞くというかヒアリングするところは。

司会:今たくさんのお話が出てきましたが、費用、宗教。そして相続とかお墓とか位牌のところ。最近、日系人の南米、ペルー、ブラジルの方たちの相続の相談がすごく増えてきているというお話を弁護士の先生がたからお伺いするのですが、先ほどの共同墓地の相談が南米出身の日系人の人たちから増えているのと、同じ高齢期に入ってきているということなのだろうと思うのです。ありがとうございます。

木下さん、いかがですか。中国の方、特に帰国者の方たちは、事前相談をどのようにされているのでしょうか。

木下:今、鶴野さんのお話を聞いて、2年前のことをちょっと思い出しまして、ちょうど2年前に父が他界し、その前に急変して、最後をどうするかという話を事前に家族内でお話ししてなくて、病院であと持って1日か2日。「後のことを考えてください」と言われたときに、初めて、じゃあどうしようかと。いろいろ事情があり、普通に、要は一般葬でできないという状況で、実は市内の大小葬儀屋さんを1週間回りまして、ティア

さんにも2カ所ぐらい、港と熱田を回らせていただきました。最終的にティアの熱田に決まったとき、まだ本人が死にたくないということだったのだろうと思うのですが、生き返り、リハーサルをさせていただいたことになったのは3年前です。その1年後の2年前、ちょうど1年たってから亡くなり、迷わずティアの熱田に電話してお願いしたということがありました。

ちょっと前置きが長くなり恐縮ですが、中国の場合、死というのはタブー視されていて、日本社会も同じような傾向があるのですが、事前にどうするかという話は、なかなかしづらいところがあります。ですから、事前に相談してということが、あまりないですね、帰国者の場合は。ただ、葬儀に関しては、特に宗教的な部分がないので、普通にどこかの葬儀屋さんをお願いして、やっていたいっているのです。

お墓については、16年ほど前、八事霊園の中に、中国帰国者のための共同墓地というのを造りまして、どうしても自分たちでお墓が買えない人については、そこを利用していただくというような形になっています。ですから、お墓自体については、皆さんあまり心配されていないです。

ただ、事前決めがなくて、私の父親の場合と一緒にですね。もう一つ、日本の葬儀に関する知識・情報が非常に不足していて、いざ誰かが亡くなったときに、あたふたしてしまうのです。何をどうすればいいかわかっていないため、連絡が入ってくる、誰かが亡くなったと。どうしようかというようなことが多いです。

それについて、今後、そういった外国人に日本の葬儀・葬祭に対して、利用するかしないか。利用しない方も見えるので、利用するという方に対して、そういった勉強会を開いていく必要があるのかと、帰国者のケースから感じております。今回、ティアさんにご登壇いただいて、また今後、そういった地域の中で外国人向けの日本の葬儀・葬祭に関する勉強会の開催に、ご協力いただけたらと思います。

話が少しずれましたが、帰国者の場合は事前相談というのは、基本的にあまりないです。本当に亡くなったときに助けを求めるといような状況です。

司会：日本もそのような考え方はあるかと思えます。死について語ることがあまりよくないというところから、生きている人の死について話すのはどうかということかと思うのですが。でも話題にしないが故に、情報を得ることがなく、事が起こったときにどうしたらいいのか、自分はどのような選択肢があるのか、どこに行けばいいのか全く分からないというような状況があるという話でした。

もう一方のご質問。これ、木下さんに向けてかもしませんが、これも皆さんにお答えいただけたらいいかと思えます。木下さんの終活には、老いてゆく人生設計が必要だというお言葉を、とても重く聞きました。そして、人生設計を考えるにはどのようなことが必要で、今の日本に何が不足しているのでしょうか。これは海外出身の方が、日本でライフプランを考えていく中でということだと思のですが、人生設計を考えるには、何が必要で何が不足しているのか。例えば病気になったときや、高齢になった方が、母国に帰るか日本で最後を迎えるのか。そうしたことを考える際に、要素となるものは何でしょうかというように聞かれています。自分の国に帰るか、日本で最後を迎えるかというときに、一人一人が何を基準にそれを考えたらいいか。要素となるものは何でしょうかという質問ですね。

もう一つ。三つあります。文化という単語がいろいろなところで出てきましたが、日本にいらっしゃる外国にルーツを持つかたがたの文化が漠然としています。どのように認識をすればよいでしょうか。一つ一つ、大きな質問ですが、どうしましょう。

まず一つ目の質問からいきましょうか。人生設計を考えるには、どのようなことが必要で、何が不足していると思えますかということ、木下さ

ん、お願いできますか。

木下：外国人高齢者における老後の人生設計ですね。老いたライフプラン。これ、異文化「終活」を、異文化「終活」に限らず、異文化背景を持つ方が日本で暮らしていく。高齢期を迎えて、その後の第2人生を日本でどう迎えていくのかということが、非常に大事ですね。外国人高齢者の介護、終活に取り組む中で感じたことが、もちろんこれと方程式というのは成り立ちません。みなさん、それぞれ、個々のコミュニティにおいて事情が異なるであろうし、個人も個々の価値観を持っているので、これだというものがないのです。基本的に私が感じるのは、今後、本国に帰られるのか、あるいは日本で最後を迎えられるのか、これがなかなか決められない部分もありますし、いったんここで決まったとしても、環境によって変化していくこともあると思います。少なくとも、仮説的に日本で今後、最後を迎えることを考えたときに、そこに必要なのが、この異文化「終活」セミナーで定めた定義のように、生活していく中で必要とするものが、全てこのプロセスに含まれるかと考えております。

その要素として、これから当然、健康面においては医療が必要になってくるし、体が衰えて要介護になったときに、介護の部分。当然、生活する上での経済基盤となる年金、あるいは住まい。今後、住まいにおいては大事なポイントになってくるのではないかとということにも考えております。というのが、特に普通のアパートを借りている高齢者たちが、何らかの理由がきっかけになって、そこを引っ越さないといけないことになったときに、日本人の高齢者が引っ越しをするのも、新しい住宅を探すのも大変と聞いております。今度、外国人の高齢者になってきたとき、日本人の高齢者以上に問題が多発していくのではないかと思います。

その中で、さらに生きがいですね。言葉が不自由で、地域とのつながりが薄い中、自分の生きが

いをどう持っていったらいいのかというようなことも生じてくるだろうと思います。さらに病気になるったら、そこで終末ケアや看取りなど、そういったことを含めて、全部このプロセス、過程に含まれるのではないかと考えております。以上です。

司会:今いろいろなことが出てきましたけれども、言葉のこと、そして生きがいと言われましたが、その人が生きる意味というところから考えていくのが大事だという話でした。松浦さん、もちろん外国から来た方、日本で長年住まれている、高齢期を迎えるという方はもちろんですが、ライフプランと考えたときに、長年この地域を中心にした海外から移住されてきた方たちと関わられてきて、今ベトナムの方ですと若い方たちが多く、フィリピンの方も数十年住まわられていて、南米の方たちはまたさらに長い期間住まわられています。関わられてくる中で、必要と不足、ライフプランを考える中で、どのようなことが必要で、何が不足しているかというのは、高齢期も含めてですが、お一人ずつ、海外出身の方たちが日本で一生を過ごされていく中で、何が不足しているかというのはいかがでしょうか。

松浦:老いの人生設計とは、例えばこのぐらいになったらもう本国へ帰りましょとか、その設計というのは、これは私の考えなのですが、考えても、体が突然どうなるかも分からないし、全く状況は分からない。しかも外国人の場合は、さらに不安定要素も多いし、どうなるか分からないという意味では、人生設計は無理じゃないかと。じゃあ、そういう老いのことやいろいろなことを聞いていて、例えばある高齢の方が、自分はずっと高齢になったら国へ帰ると言っていた人が、この間、80過ぎですけど会いましたら、私はもう日本で最後までいると。日本で骨をうずめる。「どうしてですか」と言いましたら、もう本国には誰もいないと。家族も妹もみんないない。だから、あとは日本だと。それ聞いて、考えてみたら、一番の人生設計で大事なことは、私が今最後の一番大事な時

を生きるときに、どういうコミュニティーがあって、どう自分はそこで一緒に彼らとその時を歩むことができるか。そういう仲間がいるかどうか、ものすごく重要なことなのだと思います。

アンケートの中に寂しい一文があったのです。それは、自分が老いを考えていくときに、日本人の家族に迷惑を掛けたくないし、自分が老いていく、世話を掛けるという圧力になってほしくないような。すごく遠慮しているのです。そういう文章があり、それもあなたはここにいて当たり前だよと。あなたはあなたでいい。そのままみんな受け入れている。家族同士でというようなコミュニティーが家族であり、教会であり、どこかであれ、そういうのがもしつくられないとしたら、不足しているのはそこじゃないかと思うし、それを一番につくることが、彼らが一番いい老いを生きることと、そこを生きることではないかなと思います。

司会:そういう意味では、先ほどのサラさんのモスクでの皆さんのお話を、それ自体がコミュニティー、安心できるコミュニティーになっているということにも思いながら聞いていました。そう思うと、今の日本社会のコミュニティーがない、居場所がないというのは、外国人に限った話ではなく、日本社会の全体の課題、問題が、外国の人に表れやすいという、お話かなと思いました。それが最後の時を生きるときに、コミュニティーがないということが、外国の人に大きな不安要素として表れてくる。それをどうするかという提起もしていただけたかと思います。

松浦:ちょっと加えたいのですが、先ほど休憩のときに、われわれで話をしたとき、日本では死について語るのは割とタブーになっているという話がありました。今ホスピスで、自分の最後の時をはっきり分かって、最後をどのように自分の人生を統合していき、全うしていくかということを積極的に考えるホスピスがありますよね。カトリック教会では、カトリックの病院ではそれこそが宗教者の、教会の役割ではないかということで、そ

れを積極的に進めている。

もう一つは、西日本の電車が衝突して何百名も亡くなったあの事故の後、JRがグリーンケアをしたいけれど、どこかの大学がそれやってくれないかと言ったときに、どこも受け入れなかったのです。カトリックの大学が、それこそやるべきことだと言い、グリーンケアを始めて、今は上智大学のサテライトがやっています。要するに不条理な死を突然迎えた家族たちは、その悲しみをどう受け止めるかというようなこと。そういうことも全部含めたものが、つまり一人の人の死ということや老いというのは、その人の問題だけではなくて、関わりで生きている人間なので、関わり全体でそのことを受け止めたり、悲しみを受け止めたりする。そういうことこそ、教会はもっとすべきだということを、今、痛感しています。

司会：なるほど。繰り返しになってしまいますけど、海外の方たち、海外からいらっしやっている方たちの居場所というだけでなく、宗教の役割みたいなものなのですね。ちょっとうまく表現できないですが、その辺り、サラさん、いかがですか。モスクの先ほどのお話とちょっとリンクしてくるのかと思いつつ、聞いていたのですが。

サラ：何を答えたらいいのか、ちょっとよく分からないのですが。人生設計についてですと、「アンパンマン」の主題歌を思い出していただきたいです、「何のために生まれて何のために生きるのか分からないなんて嫌だ」という歌。今頭の中で多分皆さん歌ってくださっていると思いますが、イスラームは、その答えをもう手にできているのです。自分が今このドニヤで生きていることの意味、そしてすべきことは、それこそ右の肩の天使が書き留めてくれるような善行を積んで、最終的にアーヒラ＝来世で報われるために生きているのです。だから、そんなに細かいことを考えなくてももうちょっと楽に生きていける、お任せ状態というか、細かいことに汲汲とせずにもっと鷹揚に構えて、自分が進むべき道、日々すべきことが決

まっていて、それこそ六信五行の五行などやることが決まっていて、それほど難しく考えてはいないような気がします。もちろん人によって違うのですが、全体的に見ると楽に生きている人たち、というのがムスリムなのだと思います。

死がタブーだという日本の文化と違って、先ほど申し上げたように、死は終わりではなく、次のステップに行くためのただの通過点でしかないのです。愛する人との別れは確かに寂しいです、ドニヤでは。でも、神が許せばアーヒラでまた共にいられるので、その未来への期待もあればそこまで大騒ぎすることでもないのかと。泣いて騒ぐのはやめましょうというのが、ムハンマドの伝承にあります。ムハンマド以前のアラブの習慣では、服を破って泣いて騒いでということがあったようですけれど、そういうことはやめましょうと。確かに今は別れることがつらい、でも、未来でまた会えるという、そこに向かって右肩の天使が記録するような生活を日々していけば、いつかまた会えるという希望があるので。だから、何が必要かということを考えなくていいぐらい楽に生きてしまっています。答えになってなくてすみません。

司会：何も必要ではない。今あるもので大丈夫。そういうことなのですね。

サラ：もちろん、コミュニティが大事だとか家族が大事だということはありますけれども、ライフプランとして、何歳になったらどのようにしてとか将来的にどこの国に帰ってなど、神父さまがおっしゃったようにシチュエーションによって変わるわけですから。だとしたら、思い煩うことはないという。神様が決めた時間があって、それが与えられたこのドニヤでの命の期間であるから、だから、それを全うするという感じですね。

司会：今それぞれ、木下さんと松浦さんとサラさんにお話しをいただいたことが、三つ目の質問として、文化という単語がいろいろなところから出てきましたが、その文化をどのように認識すればいいのでしょうかという質問でした。今のそれぞれの

方のお答えが、文化と表現していか分らないですが、それぞれの認識で、それぞれの在り方というような表現をされたのかと。直接のお答えではないですが、今いただいたメッセージを、それぞれが受け取って考えることが、いただいた質問への答えかと思えます。

では、あつという間に時間が来てしまいましたので、最後、お一言ずつ感想でもいいですし、きょう、他の方の報告を聞いて思ったこと、あといただいたコメントの中でちょっと言い足りなかったこと等あればと思いますが、お一人ずつ。どうしましょう。挙手制でいきましょうか。準備ができた方から。どなたからでもどうぞ。

サラ：言い足りないことはありません。ただ、何度か言った、土葬の場所がないことだけ。それが偏見から来るものであるならば、とても悲しいことなので、ぜひ変な集団をイスラームの代表と考えないでいただきたいです。ムスリムや外国人にとって、日本が生きやすく死にやすい国であるといいなと思えます。ありがとうございました。

松浦：キリスト教の信仰から死生観といわゆる終活について考えることはあっても、実際にこのアンケートを採って、生の外国人の声を聞いたときに、彼らが、今、異国の地で生活しながら、どんな思いで自分の死について受けとめているかということがすごく響いてきました。今回、そういう意味で外国人の終活、異文化の終活というテーマは、私にとって考えるチャンスになりました。これから教会で、こうした声に応え、彼らと共に歩める教会になりたいと強く思いました。ありがとうございました。

鵜野：2点ありまして、1点は、外国人の方とのわれわれの仕事でのお付き合いとか、関係性が、今ほとんどないような状況です。ただ、見えてないところがすごくたくさんあって、われわれとしては、外国人の方のお葬式をお手伝いしているの

ですが、特に何もないのでそのままいっているところが、多分あると思います。そこをこれから少し意識しようと、1点思ったというところと、特に最近、われわれの仕事の中で課題感としてあるのは、お一人さまの問題が今、大きな問題になっています。そこはわれわれだけで解決できる場所ではないので、当然、木下さんのところとの、特に中国から戻ってこられた方についての連携も、行政を踏まえてしっかりやっていかなければいけないという課題感は、最近、あります。外国人というところでは、あまり考えてなかったのですが、日本人のお一人さま問題については、われわれ、行政も含めていろんな関係機関との連携はやっていかなければいけない、大きな問題だと思っていたのですが、今回こういう機会の中で、外国人の方の部分もあるのではないかという、きっかけになりました。ありがとうございました。

木下：きょうのセミナーのテーマで、表題にもありますように、考えるセミナーですね。本当に初めて知ることたくさんありました、私にとって。ぜひ、今個々の価値観、死生観がある中で、これから増えていく高齢者、あるいは亡くなられる高齢者と、その方らしく最期を迎えられるように、どうすればいいかと、ぜひこれを機に皆さんが考えていただいて、それで終わらずに、次につなげていくようなアクションを起こしていただけたらと願っております。どうもありがとうございました。

山本：皆さん、活発な議論をありがとうございました。3時間があつという間に終わった感じがします。いろいろな国の文化や死生観に基づいて、葬儀を含む終活の考え方がいろいろあるということ、あらためて教えていただいたかと思えます。また私たちも外国人高齢者の支援と言いますか、できることは何かということを探っているところですが、本当にいろんな考え方があるということで、これからもっと学ばせていただきたいと思っています。

私どもも、前回も言いましたけれど、当事者の方へアンケート調査を行っておりまして、コロナの関係でたくさん採れなかったのですが、集計中です。また結果が発表できるようになりましたら、お知らせしたいと思っています。そして、その中から幾つか聞き取り調査も行いたいと思っていますので、またご協力いただければと思います。そして、来年度も第4回目を行うという予定になっておりますので、また皆さまと一緒に考えることができればと思います。報告者の皆さま、参加者の皆さま、ありがとうございました。

<参考>

名古屋モスクホームページ



名古屋モスク Facebook

